

事例研究報告

高等部において 日常生活の指導で指導方法を 効率的に共有するための取り組み ～SWPBS実践に向けて～

阿南支援学校での 日常生活の指導における指導実践 (SWPBS)

小学部(平成30年度～)
中学部(令和2年度～)

- ① 「日常生活チェックシート」を用いた効率的な実態把握→指導目標設定→引継ぎのシステム構築
- ② 指導目標を個別の指導計画と連動
- ③ 進捗状況・結果について教員同士で協議

高等部に引き継がれた
「日常生活チェックシート」活用を模索

学習グループの生徒の実態

- 全生徒数 8名
- 言葉で十分なコミュニケーションがとれる生徒は少なく、具体物や写真カード、簡単な記述で補っている。自分の思いを伝える方法が限られており、十分に伝わらない場合に情緒的に不安定になる生徒が数名在籍している。

教員の願い

- 生徒が安定した情緒で一人でできる場面や支援をうまく受けられる場面を増やしたい。
- HR担任と授業担当者間で指導内容を効率的に共有したい。
 - ・生徒が、現在どの程度の支援が必要なのか。
 - ・指導が停滞する要因、考えられる対応。
 - ・指導者が変わっても、同じ結果が出ているか。
 - ・生徒が安定した行動ができるための条件。

学習グループの 「日常生活の指導」の指導形態について

- ・毎日1時間目に行く。内容は着替えやお手伝い活動、朝の会など。
- ・個別の指導計画はHR担任が立案する。
- ・一対一、あるいは生徒二人を教員一人で指導する。

例



月 教員A
火 教員B
水・木 教員C
金 HR担任(計画立案者)



月・水・金 教員D
火 HR担任
木 教員E

計画立案者のHR担任は週3回別の生徒を指導しながら様子を観察



月・火・木 HR担任
(計画立案者)
水・金 HR担任

様々な教員が少しずつ関わっており、指導の共通理解に時間を要する現状

アドバイザーからの助言①

○HR担任と授業担当者の支援方法に差異が生じてしまうことについて

記録(グラフ)は教員の支援の違いを視覚化できる。グラフを一緒に見て、今生徒がどの段階の支援ならできるのか、行っているのは不要な支援ではないか、次にどれだけ介入内容を減らしていくかなど、HR担任と授業担当者が生徒の現状を共通理解し、対応を一緒に考えていく。

アドバイザーからの助言②

○ 支援の度合いや生徒の現段階を，正確に記録に反映させる難しさについて

はじめは正確な記録がつけられなくても仕方がない。今日の支援はどうだったか，振り返る（振り返ってもらおう）ことが大切。スキルがある教員がアプローチをし，具体的な情景や対応をあげてもらったり，一緒に映像で確認をしたりすると効果的である。高等部教員の共通認識の基盤となるトレーニングが必要かもしれない。

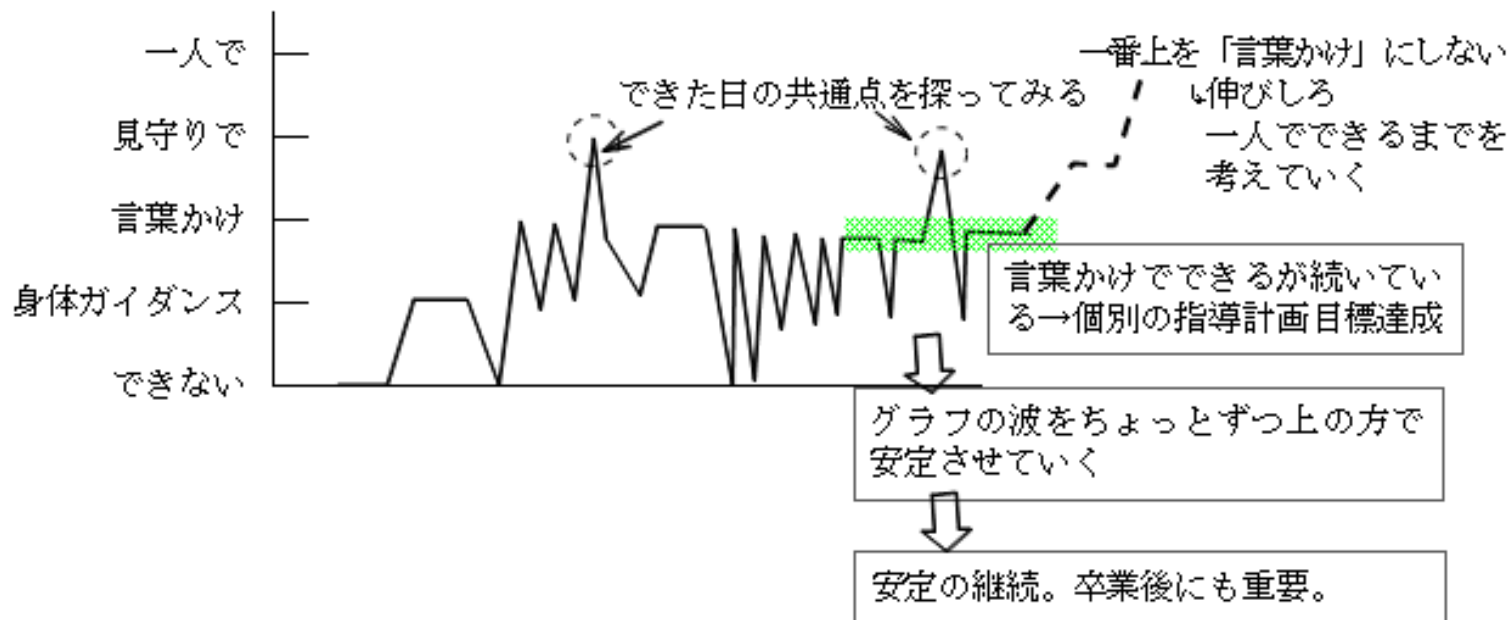
アドバイザーからの助言③

○情緒が不安定な生徒に対する指導目標の設定について

「○○(行動)が担任・担任以外とできる」を目標としてはどうか。ただし、ベースラインをとった時に、伸びしろがあるかどうかが大切である。

目標 「言葉かけで○○をすることができる」

例



助言を受けての見直し

対象生徒の決定

実践の初年度であり、HR担任と授業担当者間に生じる支援方法の差異を丁寧に埋めていく必要がある。そのため、HR担任が指導する機会の少ない生徒から、3名に絞って実践を行うことにした。

指導の手続き

- ①授業担当者へ取り組みの主旨と記録の取り方の説明
- ②授業実践
- ③進捗状況検討会(学部主事・HR担任)
- ④学部研修会

記録方法

指導内容や教員の経験年数等を踏まえて、以下の3つの方法で記録を行った。

■ HR担任と授業担当者が記録をつける

■ 指導は授業担当者が行い、記録はHR担任がつける



■ 複数のHR担任が記録をつける

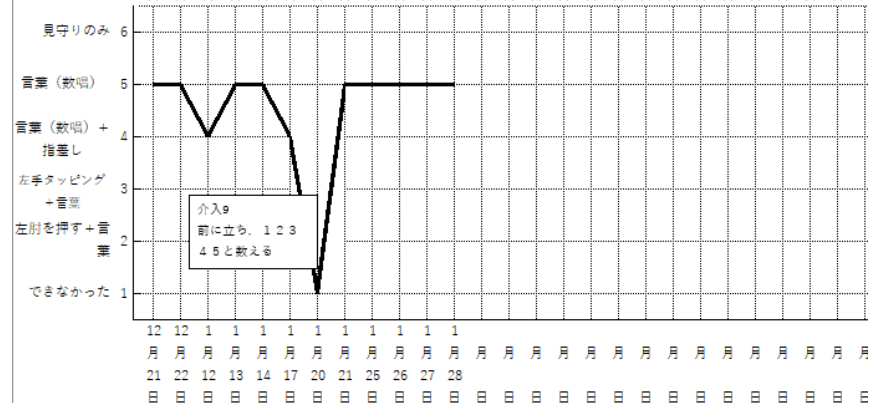
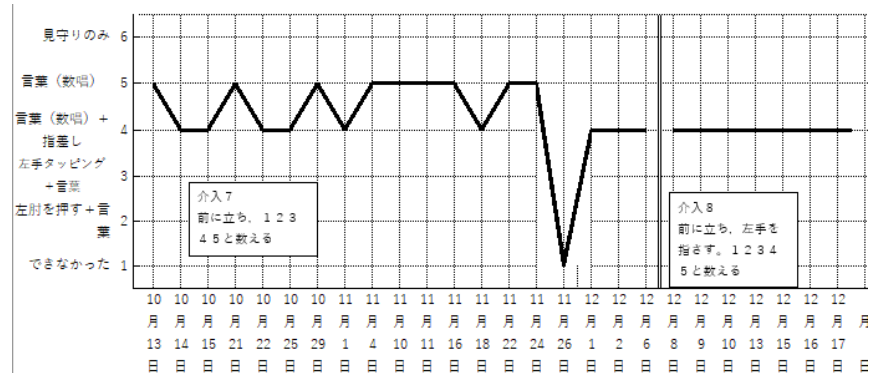
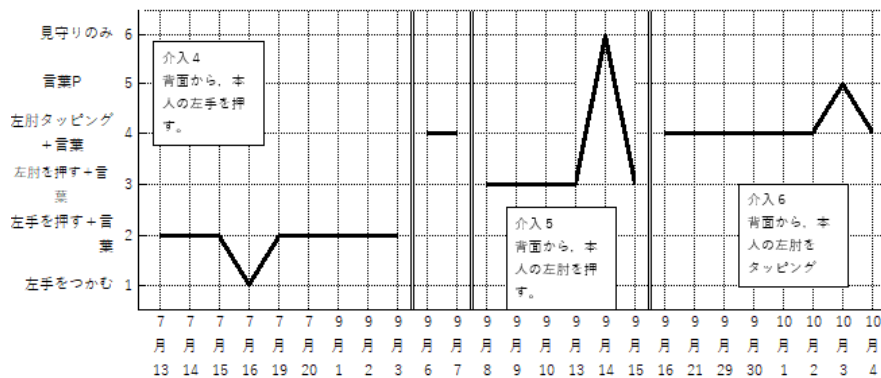
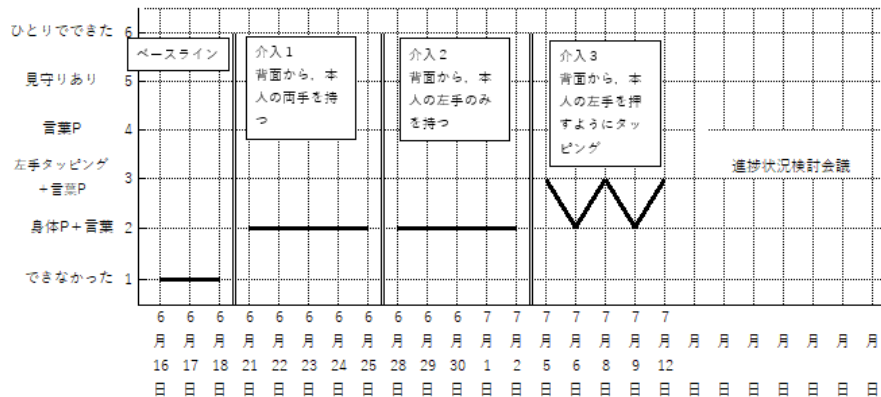
指導の成果①

■ HR担任と授業担当者が記録

HR担任と授業担当者ともに支援学校経験歴が長い

目標（手洗いの後、（右手でハンドタオルをつかみ、）左手と合わせるができる（前期））

手立て（教員が背後に立ち、左手に手を添えて右手と合わせるように促す。言葉かけ「ふきふき」→歌唱に変更
賞賛方法（「できたね」と大きく褒める。



指導の成果①

■ HR担任と授業担当者が記録

よかった点

- ・指導初期から共通した指導を行うことができた。
- ・現状を確認しあう機会が増え、他の授業でも、生徒の支援案を出しあうようになった。

課題

- ・細かいステップを設定することで、順調に支援が減っていったが、授業担当者にとっては授業に入るたびに手立てが変わる時期があった。

指導の成果②

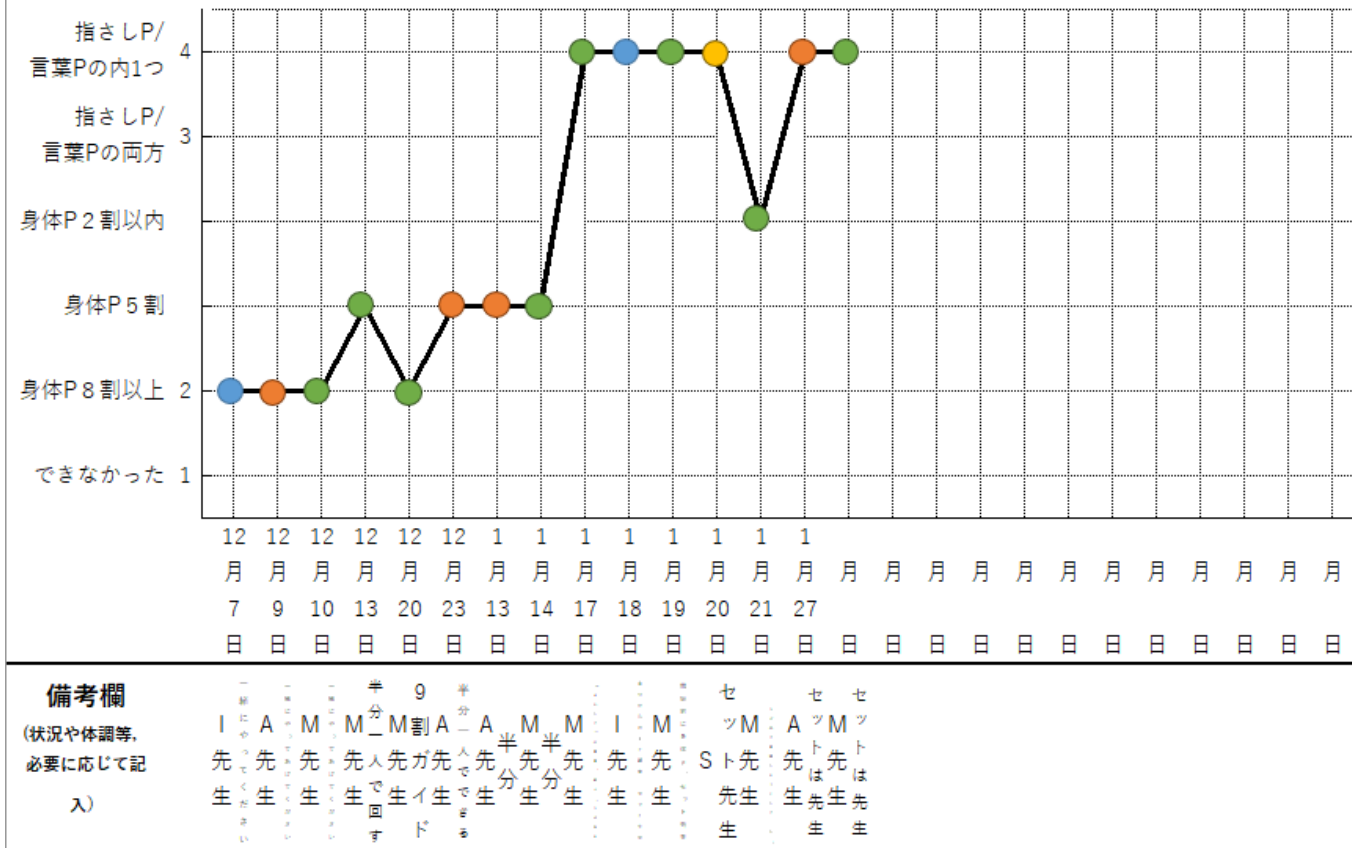
■ 指導は授業担当者，記録はHR担任

HR担任は支援学校経験歴が長い

目標（手回しシュレッダーを使ったお手伝い：ひとりで一枚の紙が終わるまでレバーを回し続ける動作ができるようになる）

手立て（手順書で活動への見通しを持たせる。動作についてはスキルの獲得に伴いプロンプトを徐々に減らしていく。）

賞賛方法（拍手と「できたね」の言葉かけで褒める。）



指導の成果②

■ 指導は授業担当者，記録はHR担任

よかった点

- ・一人の教員が記録を取ったため，支援の度合いの判定にズレが生じなかった。
 - 複数の教員の支援の度合いを正確に把握することができた。

課題

- ・記録を行うHR担任が，授業を担当しない日でも記録のために様子を見る必要があった。

指導の成果③

■複数のHR担任が記録をつける

HR担任(指導計画立案)の支援学校経験年数が短い

- ・記録用紙作成時の悩み
- ・指導時の悩み

手立ての
アドバイス

- ・進捗状況検討会 (学部長・HR担任)
- ・HR担任間での話し合い

指導目的や方法をより明確
にし、担任間で共通理解

記録用紙の再検討

日生と自立活動で指導し、結果をグラフで共有する

指導の成果③

■複数のHR担任が記録をつける

・経験年数の長い教員が自立活動で実施。

・学習の機会を多く取り、日生へのスムーズな般化をはかる。

・学習の状況を担任間で共有。

手立て	<ul style="list-style-type: none"> ・ さんが現時刻を言ったあと、教員が「次の時間は〇〇です」と伝える（発問） ・ 5秒待ち、教員がアナログ時計の次の時間の位置を指差しで示す ・ 5秒待ち、教員がアナログ時計の現在時刻と次の時間のあいだを指で示す ・ 5秒待ち、教員が指の動きとともに数唱(1.2.3...、5.10.15...等)する ・ 5秒待ち、教員と一緒に数える。
評価の記入について	ひとりのできた=6 指差しP(時刻の指定)=5 指さしP(間を示す)=4 指さしP+言葉P=3 指差しP+言葉P(一緒に数える)=2 できなかった=1

1月 19日	
時間(分)	評価
33→35	5
40→44	5
53→56	5
2→7	5
11→14	5

1月 20日	
時間(分)	評価
27→30	5
55→5	5
48→57	5
52→55	5
38→51	3

1月 21日	
時間(分)	評価
26→29	5
29→35	5
42→48	5
1:58→2:07	5
3→8	5

1月 24日	
時間(分)	評価
27→40	5
27→33	5
29→50	4
30→42	5
30→32	5

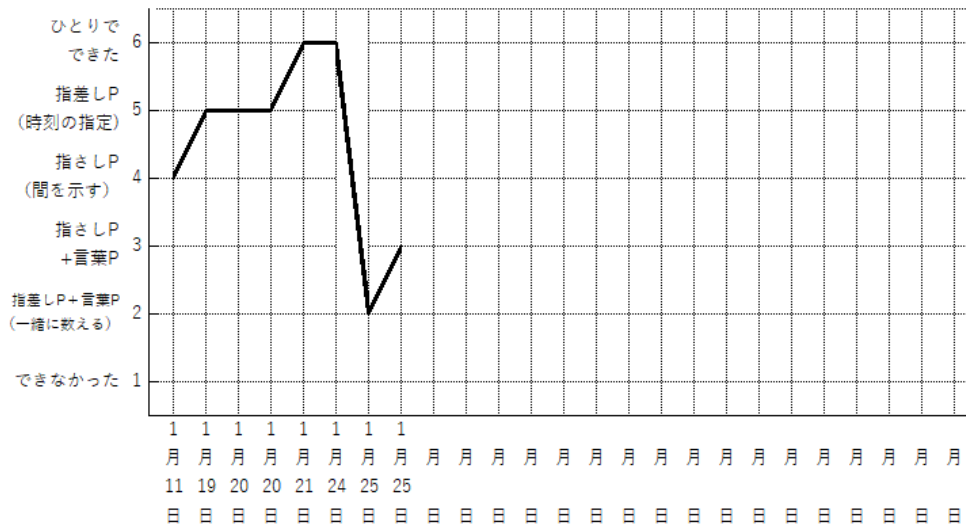
1月 25日	
時間(分)	評価
	4
	6
	6
	6
	6

月 日	
時間(分)	評価

指導の成果③

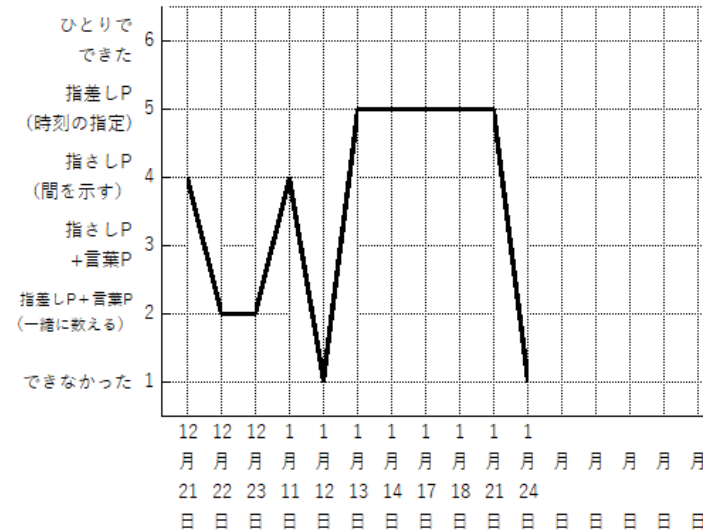
■ 複数のHR担任が記録をつける

朝の日生
 目標 (スケジュールの時間に合わせて、行動することができる。
 手立て (教員が次の行動の時間を示し、現在時刻からあと何分有るか確認する。
 賞賛方法 (言葉をかけて褒める。(「まる」や「いえーい」によく反応する。)



備考欄 (状況や体調等、必要に応じて記入)	介入① ・模型で行う。 ・模型には長針を2つ用音する ・教員が針の1つを現在時刻に移動 ・教員がもう一つの針を行動時間に移動	介入② ・模型の針を用音する。 ・教員がアナログ時計に模型の針を重ね、次の時間を示す	介入③ ・〇さんが現時刻を言ったあと、教員が「次の時刻は〇〇です」と伝える(声) ・5秒待ち、教員がアナログ時計の次の時刻の位置を指差して示す ・5秒待ち、教員がアナログ時計の現在時刻と次の時刻のあいだを指で示す ・5秒待ち、教員が指の動きとともに数唱(1,2,3...、5,10,15...、等)する
--------------------------	--	--	---

帰りの会の前
 目標 (スケジュールの時間に合わせて
 手立て (教員が次の行動の時間を示し、現在
 賞賛方法 (言葉をかけて褒める。(「まる」・



備考欄 (状況や体調等、必要に応じて記入)	介入① ・模型で行う。 ・模型には長針を2つ用音する ・教員が針の1つを現在時刻に移動 ・教員がもう一つの針を行動時間に移動	介入② ・模型の針を用音する。 ・教員がアナログ時計に模型の針を重ね、次の時間を示す	介入③ ・〇〇さんが現時刻を ・5秒待ち、教員がア ・5秒待ち、教員がア ・5秒待ち、教員が指 ・5秒待ち、教員と一
--------------------------	--	--	---

自立活動の状況も踏まえ、
 支援度合いのズレ(一人でできた・支援あり)を担当間で検討

指導の成果③

■複数のHR担任が記録をつける

よかった点

- ・できていない行動と原因が複数の目で明らかになり、対応ができた。
- ・一人で指導をする場合でも、同じ記録をつける教員から後でフォローを受けることができた。

課題

- ・学習の状況を担任間で共有し、指導内容を決定することに多くの時間がかかった。

各記録方法の共通の成果

- HR担任と授業担当者が同じ指導ができ、学習の機会をより多く取ることができた。
- 記録を見て、生徒の達成度を正確に把握することができた。
- 手立ての検討が必要な場合は、複数の教員で話し合うことができた。

今後の課題

考え方や具体的な実践方法の浸透のために

教員も取り組みやすい事例で
成功体験を重ねる必要がある



- ・目標を立てやすく，生徒の変容がわかりやすい授業での実践も検討する。
- ・少数事例にしぼり，複数の教員によるサポート体制を作る。
- ・学部全体に対する研修で共通認識をはかる。